



くすい箱

発行

桐生厚生総合病院 薬剤部

発行責任者 河井 利恵子

編集担当者 渡辺 満寿美

大手 直樹

第 58 回目のテーマは、“婦人科疾患に対する女性ホルモンの薬について”です。

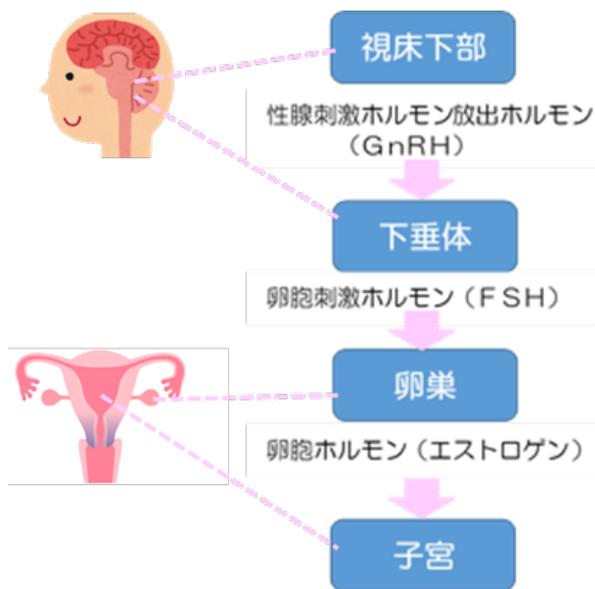
女性ホルモンにはエストロゲン（卵胞ホルモン）とプロゲステロン（黄体ホルモン）の2種類があり、女性の体に大きな影響を及ぼします。

今回は、このエストロゲンと関係の深い更年期障害と子宮筋腫に対して使用されるお薬についてお話しします。

エストロゲン(卵胞ホルモン)とは

脳の視床下部というところから性腺刺激ホルモン放出ホルモン（GnRH）が分泌されて脳の下垂体を刺激すると卵胞刺激ホルモン（FSH）が分泌されます。この卵胞刺激ホルモン（FSH）が主に卵巣に働いてエストロゲンが分泌されます。

血液中のエストロゲンの濃度を常に脳がチェックしていて、減ってくると増えるように、増えれば減るよう司令を出します。



エストロゲンは、子宮に作用して、受精卵のベッドとなる子宮内膜を厚くする働きをします。また、女性らしさを作るホルモンとして、乳房の発達、皮膚、骨、筋肉、脳、自律神経などの働きにも関係しています。思春期から分泌量が多くなり、30代でピークに達し、更年期になると減少します。

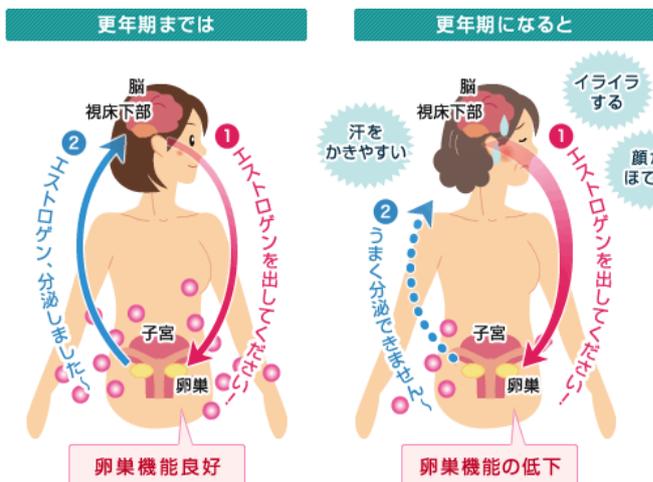
この女性ホルモンの調節機構が順調であれば問題ありません。

ところが視床下部は様々な影響を受けやすく、急激なダイエット、ストレス、ハードな運動、加齢などで調節機構が乱れるといろいろな病気を引き起こします。



更年期障害とは

卵巣の機能低下に伴い、エストロゲンが減少することによって、自律神経失調を中心とした様々な不定愁訴を主とする症候群です。この不定愁訴には、のぼせ・ほてり（ホットフラッシュ）・めまい・頭痛・全身倦怠感・不眠などの身体的な症状と気持ちの落ち込み・無気力・不安・憂鬱などといった精神的な症状など多彩な症状があります。



更年期障害の治療に用いる薬

更年期障害の薬物療法には、のぼせや頭痛などの多彩な症状を緩和する漢方薬での治療や、エストロゲンの減少に対するホルモン補充療法があります。ホルモン補充療法に用いる当院採用薬は以下のとおりです。

- エストラーナテープ 0.72mg 1回1枚で2日に1回張り替える製剤
- プレマリン錠 0.625mg 1日0.625mg~1.25mg
- ジュリナ錠 0.5mg 1日1回0.5mg 1日1回1mgまで増量できます

なお、エストロゲンは子宮体がん・血栓症・乳がん・子宮筋腫・子宮内膜症・子宮腺筋症・肝疾患などの増悪因子であるため治療中や既往のある方は投薬できない場合があります。診察時に医師にご相談ください。

子宮筋腫とは

子宮筋層にできるこぶのような良性の腫瘍のことで、エストロゲンの影響で大きくなります。30代、40代の女性に好発し、エストロゲンが減少する閉経後に筋腫は縮小していきます。症状は、鉄欠乏性貧血・過多月経・不正性器出血・月経痛・月経困難症・不妊などがあります。

子宮筋腫の治療に用いる薬

子宮筋腫の薬物療法には、月経痛や貧血に対して鎮痛薬や造血薬などを使用する対症療法や、エストロゲンの影響を小さくするため、エストロゲンの分泌を抑えるホルモン療法があります。ホルモン療法で使用される当院採用薬は以下のとおりです。

① 一過性に性ホルモンを刺激してエストロゲンを減少させる薬剤

- リュープリン注射 1.88mg 4週間に1回皮下注
- ナサニール点鼻液 0.2% 1回片側鼻腔内に1噴霧 1日2回
- スプレキュア点鼻 0.15% 1回各鼻腔内に1噴霧ずつ 1日3回

これらの薬は、性腺刺激ホルモン放出ホルモン（GnRH）の分泌を刺激します。この分泌刺激によってエストロゲンが一度上昇しますが、脳がそれを察知し、逆にこの性ホルモンの分泌が抑えられ、結果的にエストロゲンの分泌が抑えられる現象が知られています。この現象を利用して、これらの薬は子宮筋腫を小さくします。

ただし、エストロゲンを一度上昇させるため貧血・過多月経の症状が増悪するフレアアップという現象が起こることがあります。

② エストロゲンを直接減少させる薬剤

- レルミナ錠 40mg 1日1回40mg 食事の影響を受けやすいため食前内服

この薬は性腺刺激ホルモン放出ホルモン（GnRH）の働きを直接抑えることで、エストロゲンの分泌を抑えます。そのため、エストロゲンの一時的な上昇によるフレアアップは起きません。

なお、これらホルモン療法で使用される薬はエストロゲンを抑えるため、使い続けると更年期障害や骨粗鬆症などの副作用が強くなるため、原則6ヶ月間の投薬日数制限があります。

最後に…

薬剤には副作用があります。薬剤に頼り過ぎることなく、女性ホルモンのバランスを整えるためにバランスのいい食事、よい睡眠、上手なストレスの解消、適度な運動を心がけましょう。



《参考資料》 病気がみえる Vol.9 婦人科

次回は、“パーキンソン病”をテーマに2021年3月発行予定です。